

慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resources

Title	明治初期における日本初の外国人向け旅行ガイドブック
Sub Title	The study of first "travel-guidebooks" to Japan for foreign people in early-Meiji era
Author	長坂, 契那(Nagasaka, Keina)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.69 (2010.) ,p.101- 115
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000069-0101

明治初期における日本初の外国人向け旅行ガイドブック

The Study of *First* “Travel-Guidebooks” to Japan for Foreign People in Early-Meiji Era

長 坂 契 那*

Keina Nagasaka

Since 1858, many foreign people begun to come to Japan, after Japan having opened up to the western countries. In early-Meiji era, the number of foreign people who visited Japan increased, for the purpose of not only business but also traveling. At the nearly same time, Japanese publishers had begun to publish “travel-guidebooks” for foreign people. The oldest “travel-guidebooks to Japan” for foreign people was published in 1867, in the end of Edo-era.

At that time, John Murray Publishers were very famous publishers of “travel-guidebook”, both of them, it is said that created its foundation of “travel-guidebook”. They had begun to publish such books in the middle of nineteenth century. John Murray Publishers had published *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan* in 1881, since then, John Murray Publishers kept publishing “travel-guidebooks” for more than 30 years.

On tourism studies, there are still room for necessity of investigation into not only “travel-guidebooks’ history” but also definition of themselves. In this paper, I tried to investigate “travel-guidebooks” for foreign people from 1867 to 1880 (before 1881). I also analyzed those issues by taking example as the *first* travel-guidebooks to Japan in early-Meiji era.

1. 問題の所在と本稿の目的

19世紀後半の欧米人にとって、日本の開国・明治維新は、日本への政治的・経済的接触の機会の拡大と共に、日本国内旅行の機会を整えるものであったと言い直すことができる。蒸気機関の発達でイギリスをはじめとする西欧諸国では、情報や物資の運搬だけでなく人間の移動範囲も拡大し、その移動時間も著しく短縮したのである。そして、19世紀半ばにイギリスのトーマス・クック社が団体旅行ツアーの斡旋を始め、従来は上流階級のみの特権であった旅行を中産階級も行うことができるようになっていた。そして、イギリスを中心とした西欧諸国は経済的に圧倒的な有利な立場を利用して、世界中の地域

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程

の国々や民族と交渉を持つようになった。日本の開国・明治維新は、日本へ旅行目当てでやってくる旅行者の存在を認めざるを得なくなる契機でもあったのである。そして、日本への外国人旅行者がやってくるとともに、少しずつ外国人向けの旅行ガイドブックも出版され始めるようになってきた。

本稿はこうした背景のもとで作られ出版され始めた旅行ガイドブック、とりわけ日本の国内旅行のために作られた書物の持つ意味やメッセージ、機能や目的について検討する。

当時、西欧諸国でもっともよく利用された旅行ガイドブックの出版社の一つであったイギリスのジョン・マレー社は、1836年の『旅行者のための大陸旅行ハンドブック』*A Handbook for Travellers on the Continent: being a guide through Holland, Belgium, Prussia and Northern Germany and along the Rhine from Holland and Switzerland*の出版を皮切りに、『旅行者のためのハンドブック』と題した各地の旅行ガイドブックシリーズを出版した。マレー社の旅行ガイドブックは、そのシリーズの特徴である赤い皮装丁で小型の辞書ほどのサイズと分量を持った小さな百科事典のようであり、広範囲の分野、精密な地図までもが添付されていた。

1881年、『旅行者のための中日本・北日本旅行案内』*A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan*がアーネスト・サトウとホーズによって横浜のケリー社から出版された。その序文には、「この本はジョン・マレー社のガイドブックと同じ書式で製作された」という断り書きがされている〔Satow 1881〕。その後、マレー社は、『旅行者のための日本旅行案内 (*A Handbook for Travellers in Japan*)』と題した旅行ガイドブック¹⁾を1884年から1913年までの約30年間、9版に渡り出版した。正確には、ジョン・マレー社から出版されているのは1884年からで初版は横浜のケリー社から出版されたのであるが、1884年にジョン・マレー社から1881年に出版されたものを初版とした上で第二版として出版されることになったという経緯がある。ジョン・マレー社の旅行ガイドブックシリーズの書誌では1881年版は初版として扱われることになっているため、本稿でも同様に扱うものとする〔Lister, 1993〕。

また、日本の外国人社会の間で雑誌として浸透していた『ジャパン・パンチ』の1881年3月号には、イラスト付きでサトウとホーズによる旅行ガイドブック完成を報じる記事が掲載されている²⁾。掲載されたイラストは、「ハンドブックの著者たち」と題されて、主な筆者・編者のサトウとホーズと思われる二人の男性が向かい合って、「Handbook for... (解説不明) ...Japan」と書かれた本を手にしている。二人の間には、富士山と思われる山が描かれ、そこから御来光の如き日の出が上がっているのである。非常に大袈裟な印象を持つが、それだけ大ニュースであった事実が分かる。

では、それだけ大ニュースになった『旅行者のための中日本・北日本旅行案内』出版以前の外国人向け日本旅行ガイドブックは、どのようなものだったのだろうか。日本の外国人向けの旅行ガイドブックを遡ってみたところ、1867年の出版が最古であることが判明した。『旅行者のための中日本・北日本旅行案内』初版が出版されたのは1881(明治14)年であった。本稿は、それ以前に出版されていた外国人旅行者向けの旅行ガイドブックを最古のものから遡って実際にその文章を検討し、歴史の変化と社会的背景を考察する。

その際、考察対象を英語版に絞り、出版された国や地域、執筆者の国籍は問わないものとした。その理由として、第一に外国語で書かれた旅行ガイドブックのほとんどが英語であった。第二に、これは旅行ガイドブックという出版物の特徴として、執筆者と出版者との国籍や所在が必ずしも一致しておらず、一冊の旅行ガイドブックを出版するにしても、著作権所有者と出版元の国や地域が異なっている場

合が多かったという点が挙げられる。

現在の観光・ツーリズム研究では、旅行ガイドブックが観光活動に及ぼす影響の大きさについて多くの指摘がされている³⁾。しかし、観光地の調査・検討を行う際に場所イメージを探る手段の一つとして検討される場合は多いものの、旅行ガイドブック自体の研究は現在においても非常に少ないと言わざるを得ない⁴⁾。庄田元男は著書『異人たちの日本アルプス』において、『旅行者のための北日本・中日本旅行案内』・『旅行者のための日本旅行案内』全九版を日本アルプスの描写を中心に歴史的に検討した。その業績は三十数年間・9版という膨大な量の時間とヴォリュームの資料を通時的に扱ったというだけでなく、旅行ガイドブックの執筆者のみならず協力者の情報も掲載している点は、明治～大正にかけての在日外国人の非常に重要な情報源となった〔庄田1990〕。また、田中まりは、『旅行者のための日本旅行案内』第九版（1914）を用いて、当時の京都案内がどのように描写されているのかを詳細に検討した。19世紀以降の娯楽としての観光への嗜好を視覚的要素の影響によると分析し、「見るべきもの」の意識の変化を資料から読み取った。明治～大正初期の外国人旅行者の求める「見るべきもの」は、幕末期の外国人のそれとも、明治～大正期の日本人旅行者の求めるそれとも大いに異なるとし、その背景には政治的・文化的であり、江戸時代の徳川幕府を否定する明治独特の意識が隠れていると指摘した〔田中2002, 2004〕。しかし、これらの研究は、資料の中でも検討する範囲を非常に限った形での分析が主体となっており、旅行ガイドブックを持って各地を旅行した外国人旅行者の日本旅行を想定していないために、旅行ガイドブック研究というよりは地域研究の資料として旅行ガイドブックを使用した側面が強いと言える。

また、旅行ガイドブックが消費される情報媒体であるにもかかわらず、新聞・雑誌や書籍と異なり保存状態がよくないため、歴史的に収集するのは非常に困難を伴う。しかし、旅行ガイドブックは「決して尽きることのない、どこにでも存在する、旅行というものに対する態度についての資料」であり、「これらはすべておもしろく、ためになる研究テーマである」〔Boorstin 1962 (1964): 300〕。そして、何より「旅行ガイドブック」という資料の定義づけ、そして旅行・観光という営みの中での位置づけすらもされていないという問題点も残っている。

本稿は、マレー社型の形式が定着する以前の1867年から1880年までに出版された外国人の旅行案内・都市案内書を旅行ガイドブックとして位置づけた上で検討・考察を行う。

2. 「旅行ガイドブック」とは

さて、以下の文章は、1874（明治7）年に横浜で出版された『横浜案内』（*The Yokohama Guide*）の序文の一部である。文章中にある「編者（The Compiler）」とは、『横浜案内』の著者・編者であるW. E. グリフィス自身を指している。

編者は長らく、横浜周辺の詳細なガイドブックが出版される希望を持って待っていた。（中略）
編者は学識を持たないしベデカーやマレーが持っているような完璧な知識や技術も持たないが、この仕事（『横浜案内』の執筆）を引き受けた〔Griffis 1874a: PREFACE〕⁵⁾。

『横浜案内』の著者・編者であるウィリアム・エリオット・グリフィスは、明治初期にお雇い外国人として来日し、アメリカに帰国後は日本文化に関する講演・執筆活動を積極的に行った、明治初期の外

国人日本研究者である。特に、帰国後に彼が執筆した *The Mikado's Empire* (1875) は、当時のみならず現在に至るまで、日本学 (Japanology) の古典とも言うべき重要な研究成果と位置づけられている。そして彼の言う「ベデカーやマレー」とは、旅行ガイドブックの出版社の名前である。グリフィスは、旅行ガイドブックがその二社から出版されることを暗に望んでいた。彼は『横浜案内』の出版年と同じ 1874 年に帰国している。グリフィスが『横浜案内』をしたのは、大手二社がいつまでも日本の旅行ガイドブックを出さなかったからであった。それだけ、当時は「マレーやベデカー」が旅行ガイドブックとして権威があったことが分かる。

数少ない旅行ガイドブック研究者の一人である中川浩一は、著書『旅の文化誌』で今まで全くと言っていいほど行われていなかった旅行ガイドブックと鉄道時刻表の歴史を、初めて包括的に行った。特に、それぞれの言語ごとに整理されてきた旅行ガイドブックの歴史を、イギリスのジョン・マレー社とドイツのカール・ベデカー社の二社から出版された経緯を対比させながら論じたことによって、「旅行ガイドブックの歴史」の全体像を浮き上がらせた功績は非常に大きいと言える。中川は、近代以降の旅行ガイドブックの歴史を「レッド・ガイド」の愛称で親しまれたジョン・マレー社の『旅行者のための〇〇旅行案内』シリーズが最初であるとし、カール・ベデカー社の『旅行者のための〇〇案内』シリーズでジョン・マレー社とほぼ同様の形式・外見にのっとって出版したとするイギリス側、それに対する反論など、近代以降の旅行ガイドブックの始まりに関する諸説を掲載した。そして 19 世紀後半から第二次世界大戦終戦後に至るヨーロッパ各地の旅行ガイドブックの歴史を、マレーとベデカーに始まりベデカーがドイツ語版の他に英語版、フランス語版を出版し事業拡大していくのに伴い、ヨーロッパ各地でさまざまな旅行ガイドブックが相互に影響し合い現代に至るという壮大なスケールで描いた [中川 1979: 77-166]。現在でも、ジョン・マレー社とカール・ベデカー社のあまりにも類似した形式や外見から、相互での情報交換や事業に関する何らかの了解などがあったとする説もあるが、現在でも明確な決着はついていない [Gretton 1992, Lister 1993, 中川 1979]。しかし、そういった議論が生じているという事実を明らかにしたということだけでも、旅行ガイドブックの歴史を白日の下にした中川の功績は大きい。事実、これ以降の日本における旅行ガイドブックの歴史記述は、カール・ベデカー社とジョン・マレー社を起点とするものが中心を占めるようになった。その最たる例として、平凡社の『百科事典』の「旅行案内書」の項目説明には、次のように書かれている。

現在われわれが利用するものと同じような体裁と内容で、地域 (国) 別に、シリーズ形式で出版されるようになったのは、ヨーロッパにおいて 19 世紀になってからであった。とくに、ドイツ人のベデカー Karl Baedeker (1801-1859) とイギリス人のマレー John Murray (1808-1892) がこの分野の始祖とされ、前者は 1828 年、後者は 36 年にシリーズの刊行を始めた⁶⁾。両者は書名に自分たちの名前を冠したので、その後《ベデカー》と《マレー》は旅行案内書の代名詞となった。とくに、《ベデカー》のそれは、記述と地図の正確さ、知的水準の高さ、赤表紙の小型ポケット判といった装丁、英独仏といった多国語による刊行、星印による評価などで、後続旅行案内書の規範となった [岡本 2007 (1985)]。

『百科事典』の「旅行案内書」の項目を執筆した岡本伸之は、日本における観光学の確立に大きな貢献をした人物で、立教大学で日本初の観光学部を設置する際にも尽力した、日本の観光学の大家であ

る。彼が旅行ガイドブックの歴史についてこのように記述しているという点は、現在、日本における旅行ガイドブックの歴史は主にベデカーやマレーから始まっていると認識されていると言い換えることもできるだろう。

また、中川は、過去にも存在していたいわゆる「How toもの」に特化した旅行案内書を単に「ガイドブック」と呼び、ベデカーやマレーといった19世紀以降の旅行ガイドブックを「ハンドブック」と称して、従来のものと一線を画す形でイギリスの「旅行文芸」の系譜の中に位置づける試みを行っている [中川 1979]。そして、「ハンドブック」の読解にかなりの教養を必要とする理由は、その誕生が、高い知性と深い教養に支えられながら、新興の社会階層として、19世紀の西ヨーロッパ社会を特色づけたブルジョワジーの要求によったためであるとした [中川 1979: 3]。そして、マレー社の旅行ガイドブックは、「産業革命の子でもある」とし、それは労働者階級とは無縁の存在であり、支配階級の中で急速に台頭した「ブルジョワジーの慾求」が、海外旅行者の友となった「マレー」を生んでいると指摘する [中川 1979: 10]。マレーのガイドブックは、その情報の詳細さや新しさが一番の人気の元であったことは勿論であるが、それ以上に学術的・専門的な記述が大部分を占めているために、読みこなすには前提知識として相当の教養が要求される⁷⁾。いち早くイギリスにおける18世紀～19世紀後半までの旅行ガイドブックの歴史を概観したジョン・ヴォーガンも、19世紀イギリスの旅行ガイドブックは、描写内容や価格から「貴族やジェントリー、そして教育を受けた人間」が主たる読者層であり執筆者であったと指摘している [Vaughan 1974: 82-97]。

中川のように「ハンドブック」を「ガイドブック」より高次のものとして「旅行文芸」の系譜の中に位置づけてしまうことは、「ハンドブック」の持つ知識や技術の価値を評価するものであったとしても、旅行者が実際に用いるという側面から外れてしまう恐れがあると考えられる。書かれている記述内容が実用本位であって学術的・専門的ではなかったにしても、「ハンドブック」が書かれはじめて流通した19世紀後半でも確かに「ガイドブック」も存在しており、確実に需要は存在していたのである。

ジョン・ヴォーガンは、著書 *The English Guide Book c1780-1870* で、ガイドブックの前提条件について、①その土地に不案内な人間が行きたがっている（＝強く興味を持っている）場所がある、②その場所を説明できる著者がいる、そして③先の二つの条件を合わせて本にして売れると判断する業者がいる、の三つの条件があるという三点を挙げている。続けて、「ガイド（ブック）の購入は、読者が（その土地に関する）知識が不足していることと同時に、（その土地に関する）情報に対して非常に敏感であるということ、そしてその興味を満たすための経済力や娯楽を持っている人間がいるということを示している」 [Vaughan 1974: 13] と指摘する。これによれば、中川が分類したマレーやベデカーといった知識人階級・上流階級が読んだ「ハンドブック」も、それ以前の簡素な「How toものに特化したガイドブック」も、現在あらゆる階級や国籍を超えた人々が読む旅行ガイドブックも、すべて一つの流れの中で議論することが可能になる。現にヴォーガンは、その視点を用いて18世紀から19世紀後半までの英語の旅行ガイドブックの歴史を描いている。ヴォーガンによると、17世紀頃からのグランド・ツアーや英国内各地の保養地や行楽地などを扱った、すでに類似した形式のガイドブックが存在していたという。そして、19世紀初頭になると鉄道網が拡大し、鉄道によって従来の馬車以上の距離を移動するようになった人々からの要求も伴い、次第により詳細で正確な旅行ガイドブックへの要求が強くなっていったという [Vaughan 1974]。

ただ、ヴォーガンの挙げた旅行ガイドブックの条件は、西欧の一方向的な言説と表象に満ちていると

言うこともできる。例えば、①出発地（である西欧に）必ず戻ってくる、②見る-見られるという一方向性、③訪れる「自」と訪れられる「他」の顕在化、④執筆者と読者が重なっているという四点が挙げられるだろう。特に、一点目の「出発地に必ず戻ってくる」視点は、tourの語源と重なるものである[Boyer 1999 (2006)]。近代以降の観光活動は、必ず帰って来られる安全の確証の有無が重要になると言える。本稿で扱う時代の旅行ガイドブックには、記載内容の正確さよりも、この点に終始したものが多い⁸⁾。

3. 「優れたガイド」

1881年以前に出版されていた「旅行」もしくは「案内」という単語が表題に掲載されていたものは、以下の5作者6冊である。以下、出版年の古い順に列挙する。本稿ではこれらの資料を読んだ上で、検討を行った。定価は資料に記載されておらず、他の資料にも掲載されていなかったため、すべて不明である。

資料① デニス『中国・日本開港地案内』: 1867 (慶應3) 年

Dennys, N. B., et al., 1867, *The Treaty Ports of China and Japan: a Complete Guide to the Open Ports of Those Countries, together with Peking, Yedo, Hongkong and Macao*, Truebner. (1977, in CMC Reprint Series No.67, reprinted by Chinese Materials Center, Inc.)

資料② 山本覚馬『京都・周辺地名所案内』: 1873 (明治6) 年

Yamamoto, K., 1873, *The Guide to the Celebrated Places in Kioto & the Surrounding Places*, Niwa.

資料③ グリフィス『横浜案内』, 『東京案内』: 1874 (明治7) 年

Griffis, William Eliot, 1874a, *The Yokohama Guide*, by a Resident, F. R. Wetmore.

Griffis, William Eliot, 1874b, *The Tokio Guide*, F. R. Wetmore.

資料④ アーネスト・サトウ『日光案内』: 1875 (明治8) 年

Satow, Sir Ernest Mason, 1875, *A Guide Book to Nikko*, "Japan Mail" Office.

(In 1998-2001, reprinted by *Collected works of E.M. Satow, pt. 1. Major Works.*, v. 4. A Guide book to Nikko; A handbook for travellers in central and northern Japan (with A.G.S. Hawes), Edition Synapse.)

資料⑤ キーリング『旅行者のための横浜・東京…案内』初版: 1880 (明治13) 年

Keeling, W. E. L., 1880, *Tourists' guide to Yokohama, Tokio, Hakone, Fujiyama, Kamakura, Yokoska, Kanozan, Narita, Nikko, Kioto, Osaka, etc., etc.: together with useful hints, glossary, money, distances, roads, festivals, etc., etc.*, 1st ed., Farsari.

以上の中で最も新しい資料⑤の序文には、「既に、『横浜案内』や『東京案内』、『京都案内』などの優れたガイドが出版されている」[Keeling 1880: PREFACE] という一文がある。これらは、資料②と資料③を指している。つまり、1880年当時、既に資料②、資料③は一定の購買数を確保でき知名度が高かったことが伺える。この事実は、本稿においても重要な視点である。

まず、出版元を見てみよう。資料①はロンドンと香港の異なる会社の名前が明記されている。ロンドンにはテュルブナー商会、香港にはA.ショートレイド商会と書かれている。資料②は京都の丹羽社か

ら出版されている。そして資料③は、横浜のウェトモア社から出版された。資料④はジャパン・メイルという英字新聞社から出版されている。そして資料⑤は、東京のサージェント・ファルサーリ商会⁹⁾から出版されている。つまり、資料①以外は日本で出版されているのである。そして、資料①の執筆者であるデニスの所属と史料から読み取れる日本に関する知識について、このことと対応する事実が判明した。

外国語による日本最古の旅行ガイドブックは、資料①のデニスによる1867（慶應3）年『中国・日本開港地案内』であった¹⁰⁾。これは、中国と日本と両方の開港地・大都市を扱ったものである。この本の副題には『旅行者・商人・居住者のためのハンディーガイド』¹¹⁾と書かれており、読者は旅行者というよりも商人や居住者を想定している事実が分かる。

著者・編者のデニスについては「大英帝国領事館元職員（H. M.'s Late Consular Service）」とあり、他の著者名も書かれているが、彼らの勤務地は日本ではなかった¹²⁾。内容は題名にある通り、中国と日本のどちらの都市も欧米諸国中心の外国人が貿易等の理由により寄港・滞在が許可された港町やその国における主要都市のことを記載したものが中心であった。1867年付けの序文には日本が開港したとわずかに言及されているものの、大部分が中国を中心に書かれている。全体の三分の二である22都市が中国の都市を書いており、日本に関しては全体の三分の一である開港した長崎、横浜、箱館（函館）、兵庫、そして当時の政府に当たる幕府があった江戸の5都市に限られていた。そして「日本編」の記述は伝聞によるために情報の出所が曖昧で概要しか書かれていないので、編集したデニスは日本に滞在したことがないと判断できる。

ただ、この本には汽船の時刻表や航路表・簡単な運賃表、貨幣換算表、英語-中国語・日本語のごく簡単な辞書、英語で書かれた中国・日本の書籍リストが添付されていた。1867年付けの序文においても、付録・補遺として主要な船舶路線情報を詳細に掲載していることを強調している。1860年代、情報が乏しかった東アジアの航海・滞在に備えて、十分な情報と知識を求める人々が多かったことが伺える。記載されていた情報量と種類から、まずは中国や日本に到達するという第一目標を持った商人や居住者を強く意識していることが分かるのである。事実と大いに異なる情報でもそのまま掲載しているという事実は、その事実関係を確認できなかった様々な理由の存在があったとはいえ、当時の欧米圏の外国人の日本に対するある程度の意識を読み取ることができると考えることもできる。そのように考えると、この資料は、欧米的な一方向的言説と表象に満ちた一冊であると捉えることも可能である。情報の正確さよりも、安全にアクセス・滞在できるか否かを重要視した、①「出発地に必ず戻ってくる」ことを意識したものであるといえるし、徹底的なまでの②「見る-見られる一方向性の視点」、③訪れる「自」と訪れられる「他」の顕在化を感じる資料である。

次に、資料④の『日光案内』は、本稿で扱う旅行ガイドブックとして使用するのには難しいことが判明した。この資料は、1881年と1884年に出版された『中日本・北日本旅行者のためのハンドブック』（*A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan*）の主編者であったアーネスト・サトウが1875年に執筆している。サトウは外交官という職業を生かして、幕末・明治初期に外国人の立ち入りが禁止されていた地域にも積極的に足を運んで多くの地域に関する情報を外国人社会に提供した。サトウは、日本各地の地理・文化・風習や歴史などを数多く論文や記事、書籍として残し、1872年の日本アジア協会の設立にも携わっている¹³⁾。

この『日光案内』には目次がなく、序文や各地域の章立てもない。しかも、ある程度日本の生活習慣

や地理を理解していることを前提に文章が展開されているために丁寧な説明文も少なく、旅行記に近い印象を与える。サトウは、日本アジア協会だけではなく在日外国人のための英字新聞や雑誌にも、匿名で名所や土地案内、旅行記を寄稿していた。旅行記録によると、サトウは日本着任当時から日光周辺に何度も足を運んでいる [Satow 1900 (1989-1991): 407-413]。日光は彼のお気に入りの場所であったことが推察され、この『日光案内』もその反映だったようだ。この本は、すでに日本滞在が長く、日本に関する気候・地形・文化・生活にある程度親しんでいる外国人向けに執筆したものであると分かる。この資料もまた、欧米的な一方向的言説と表象に満ちた一冊である。この場合は、④「執筆者と読者が重なっている」点が合致するだろう。『日光案内』の読者は、それほどの識者でなくとも日本滞在生活が長くサトウと類似した環境にある人物を想定している。

以上によって、先述のキーリングが『京都案内』、『横浜案内』、『東京案内』を積極的に評価している視点は、本研究においても有効であるとする事ができる。

4. 対象読者の質の変化 居住者から旅行者へ

資料②の『京都・周辺地名所案内』は、1873（明治6）年に出版された。執筆者の山本覚馬は、同志社大学創立者の新島襄の義兄・同志であり、幕末から明治にかけて京都の近代化に貢献した人物であった。

この小冊子は京都博覧会に訪れる外国人の便宜を計るために執筆された。彼ら（外国人）は、長年（京都の）名所を訪れることを熱望していた上、その土産話を本国に持ち帰りたくてうずうずしていたに違いない。しかしその場所すべてが分かる訳ではないであろうから、ガイドブックを入手せざるを得ない。そこでこの本が役立つであろう [Yamamoto 1873: PREFACE]¹⁴⁾。

出版される前年の1872（明治5）年、京都博覧会が開催される80日間に限り外国人の入京が許可された。それ以前は外交特権を有する外交官かお雇い外国人しか入れなかった京都に、初めて一般の外国人が入ることができたのである。この京都博覧会の際には外国人たちは特別に「入京免状」を無条件で発行してもらえたため、京都を訪れることができた。この措置は非常に歓迎されたらしく、その後も入京を希望する外国人が後を絶たず、翌1873（明治6）年、第二回京都博覧会が開催された際にも同様の措置が取られた [丸山 1985: 96-103]。山本によるガイドブックは、その好評を受けて、第二回京都博覧会で初めて京都を訪ねる外国人のために執筆されたものであることが分かる。そして京都は、日本に居住する外国人にとって憧れの土地だったことが伝わってくる¹⁵⁾。「土産話を本国に持ち帰り」たがっていた「彼ら」は、「長年（京都の）名所を訪ねたくてうずうずしていた」とあるように、外国人の入京が制限されていたことを知っていたと推測できる。つまり、日本の近況を把握していた人々であると考えていいだろう。このガイドブックはすでに日本に居住していた外国人のほかに、日本近隣の東アジアの外国人居留地に居住する外国人や商用で頻繁に日本を訪れている外国人たちのために書かれていたと言える。「旅行者」という単語が初めて登場するのは、1874（明治7）年に出版された資料③グリフィスの『横浜案内』が最初である。

横浜は魅力にあふれた土地であるが、旅行者（tourist）にアクセスしやすいガイドの形態はまだ

存在していない。日本文学には、古物・伝説・伝承研究において貴重な資料が数多く存在する。それらは日本人の知識人や侍であれば誰でも見たり読んだりできるにもかかわらず、日本の神聖な儀式に興味を持っている外国人たちには、それを見ることも知ることも許されていない [Griffis 1874a: PREFACE]。

ここで、初めて「tourist」という単語が、明確に本文に登場した。これは、対象とする読者が居住者ではなく旅行者を明確に設定していることが確認できる点で非常に大きな変化であると言える。日本を訪れる旅行者は1874（明治7）年当時既に存在していたと分かる。そして、外国人というだけで自由に見せてもらうこともできなかった背景には、欧米諸国との条約の中に、外国人の行動範囲を著しく制限する文言が含まれていた事実も含まれている。当時の外国人たちの居住区域は通商条約によって定められており、彼らに許された自由な行動範囲の権利を内地旅行権と言う¹⁶⁾。そして、『横浜案内』の読者は、以下のように想定されていた。

この本は筆者の微力な助けなど必要としない日本の研究者に向けて作られたのではなく、日本文化に専門的な情報を求めない短期旅行者（the hasty tourist）や外国人居住者（the old resident）の方々に役立つだろう。（中略）この本を使ってくださいる方々が、小旅行をより楽しんでいただくことを望みつつ、「サヨナラ」という言葉で締めくくらせていただきたい [Griffis 1874a: PREFACE]。

ここから、想定されている読者が短期旅行者と古くからの外国人居住者の二種類であることが分かる。『横浜案内』では、横浜の概要が外国人居住区の描写を中心に書かれている。特に『横浜案内』は、外国人居住地内の詳細な説明にページが割かれている。当時通じていた汽船会社のリスト、各国の領事館、教会、英語の通じるホテルや旅館、商店、クラブ、新聞社の住所や説明が詳細に書かれている [Griffis 1874a: 10-11]。安全かつ清潔に生活が営める、当時日本を訪れた外国人たちの生活条件の最低限を揃えていることを強調している印象を与える。外国人たちにとって、日本はまだ安全確保の確認が必要であったほど情報が乏しかった事実が伺える。安全であるということ、外国人たちの生活条件が整っていること。この二点が、当時の外国人短期旅行者・居住者にとって、日本を訪れる際に第一に確認すべき重要な要素であったことが伺える。この資料も、欧米の一方的言説と表象に満ちている。『横浜案内』に関して言えば、①の「必ず帰ってくる」意識が非常に濃厚である。滞在の安全のみならず、彼らの生活の保障はすなわち、欧米的生活の保障とも捉えることが可能になる。居住者たちはすぐに本国へ帰ることはなくとも、日本の現地の生活ではなく、あくまで欧米的生活を維持することを選択している。いわゆる旅行者と必ずしも一致しないが、生活意識の面では、あくまでも欧米的世界に回帰する意識が強いと考えることも可能である。また、『横浜案内』からは、他の②「見る - 見られる」視点、③訪れる「自」と訪れられる「他」の顕在化、④執筆者と読者の一致、すべて当てはまるとも言える。詳細な横浜外国人居住区の描写は、その外の各地名所案内の描写と対比しており、②、③が明確に見られる。特に、③においては、横浜外国人居住区が訪れる「自」の側に寄り添っている印象を受け、「ホーム」=欧米的生活圏という暗黙のルールの存在を読み取ることもできるのである。

また、同年出版された資料⑤の『東京案内』序文には、「東京には、ぜひ一日以上の日数をかけて訪

ねて欲しい。東京にはそれだけの見るべき価値のある場所がある」という一文がある [Griffis 1874b: PREFACE]。当時横浜に降り立った外国人たちは、宿泊・滞在は安全で言葉が通じ西洋の流儀が通じる横浜で済ませ、東京へは日帰りで立ち寄るといった形態をとっていたことが分かる。『東京案内』は『横浜案内』とともに読まれることを意識していたのか、序文も短く、項目も『横浜案内』より簡潔にまとめられており、『横浜案内』で書かれているような英語が通じる場所や安全確保・衛生面への心配や配慮しなければならない場所はあまり詳細に書かれていない。東京は横浜から比較的近距离であり、東京滞在は日帰りもしくは2、3日という少ない日数で探索するという形態を想定していると言える。以上のことから、グリフィスの『横浜案内』・『東京案内』での短期旅行者は、商用で来日した外国人が仕事の合間に行う小旅行であったという推測もできる。

確かに、グリフィスの『横浜案内』・『東京案内』は、後の旅行ガイドブックに比べるとヴォリュームや記述内容の詳しさや専門性などは比較にならないほど簡単なものである。しかし、街の概要から名所案内、スケルトン・ツアーというモデルコースを幾通りも紹介し、さらにはごく簡単な日本語の単語集も巻末につけている。特に、スケルトン・ツアーの登場は、効率よく名所巡りを行うことで時間や手間の短縮を図る短期旅行者の増加を読み取ることができる。一日から一週間で合理的に横浜ないし東京とその周辺地を満喫して次の予定や日程をこなそうとするその姿は、まるで各地を数日間の滞在で巡っていく世界周遊旅行者と重なるのである。しかし、「短期旅行者」が具体的にどのような旅行者であったのか、具体的な状況を読み取ることが難しい。それがより明らかになるのは、その後の1880（明治13）年出版のキーリングによる旅行ガイドブックであった。

1880（明治13）年、資料⑤『旅行者のための横浜・東京…案内』は、1881年のマレーシリーズ初版の出版から一年早く東京のサージェント・ファルサーリ商会から出版された。初版の序文の冒頭は、次のような疑問から始まっている。

この国で面白い場所はどこでしょうか？ どうやってそれを見ることができのでしょうか？ そこへ行くのに一番いい行き方は？ 滞在中、一番お得な過ごし方は？ これらの他にもたくさんの質問が、日本へ来た外国人から寄せられる。（中略）このような質問に答え旅行者に便利なヒントを提供するのが、この小冊子を編集する目的である [Keeling 1880: PREFACE]。

この文章から、日本を訪れる外国人旅行者たちの多くは、日本の地理や事情に詳しいキーリングに旅行のノウハウを尋ねていることが読み取れる。従来の旅行ガイドブックでは、その多くが日本に居住している外国人を主に扱っていた。資料⑤においては、初めて旅行者だけを中心に読者層に想定していることが分かる。グリフィスの『横浜案内』・『東京案内』で一部「短期旅行者」という単語は登場していたものの、それは副次的なものに過ぎなかった。外国から日本を訪れる旅行者は1880（明治13）年当時に存在していた事実が、「この国」、「日本へ来た外国人」と明記されていることから分かるのである。

そして、キーリングが、グリフィスが望んだ「マレーやベデカー」とは一線を画す形で製作したことが分かる一文がある。

私は日本全体を詳細に記述したものを作ろうとしたわけではない。（中略）数日間という限られた時間の中で名所めぐりを出来るように、簡潔かつガイドなしでも回れるような便利な形態にまと

めた [Keeling 1880: PREFACE]。

キーリングの旅行ガイドブックで想定されていたのは、外国からの日本旅行者である。つまり、1880年の時点で、外国から数日間の滞在として日本を訪れる外国人旅行者がすでに一定数存在していたのである。ここから、世界一周旅行者が、この時期には日本に立ち寄り始めていたという推測が立つ。1880年に出版されたキーリング初版は、東海道を中心に東京から大阪・京都までの広範囲を扱っている。デニスのもとは異なり、開港地だけではなく宿場町や大都市も含まれている点は重要である。キーリングの旅行ガイドにおいて、初めて単独の都市ではなく複数・広域の地域を扱ったものが登場したのである。日本旅行者の動線が、点から線に変化したとも言うことができる。そして、その章立てからして、横浜で日本に上陸してから鉄道などで関東周辺・関西方面へ移動し、最終的に神戸で上海・香港方面へ船出するというスケジュールを想定していると考えられるのである。

それを裏付けるように、1872年、世界初の世界一周旅行がトーマス・クック社によって行われたという事実がある。翌1873年、一行は横浜に寄港し、数日間日本に滞在している。この後数十年間に渡り、世界一周旅行が欧米の上流階級の中で流行する。実は、日本は初期の段階から世界一周旅行のコースに組み込まれていたのである。当時トーマス・クック一行は、横浜着～江戸（東京）、大阪から瀬戸内海沿岸を経由して長崎発で中国大陸へ向かっている。横浜では英語表示も至る所にあり、鉄道でも英語が十分通じたという。そして、クックは瀬戸内海沿岸の美しさに絶賛し、日本発祥の人力車を母国へ持ち帰ったという逸話も残っている [Brendon 1991 (1995): 248-250]。

キーリングのシリーズは現在確認できるだけでも第四版まで出版されていたので、1890（明治23）年まで十年間支持されていた。そして、この後のマレーシリーズの出版時期と重なっているにも関わらず、形式・書式・文体・内容もその後出版されたマレーシリーズの影響がほとんど見られない。この点からも、キーリングのシリーズが目指した安価で持ち運びもよい上に簡潔かつ必要な情報を押さえた旅行ガイドブックが支持され続けていたことが分かるのである。また、欧米の一方向的言説と表象は、キーリングの旅行ガイドブックで総合的な到達を見たとき捉えることはできないだろうか。それまでは単独の都市の中でしか扱われてこなかった視点が、東海道というルートによって東京～京都・大阪という複数の都市にまたがって適用されている。まず、①の「必ず帰ってくる」視点は、日本旅行の出発地と到達地が異なるという今までにないルートが取られることによって、日本は本国に帰るための通過点に過ぎないという意識が読み取れる。次に、②「見る-見られる」、③「自」「他」の存在においても、もはや複数の都市でも同一の視点が適用されるという、「日本」イメージを単一に固定化しようとする意識の変化が読み取れる。④の執筆者と読者の同一という点においては、キーリングの人物像が確認できていないために断言は難しいものの、序文で旅行者たちのリクエストや質問に答える形で製作した旨明記されていることから、意識の上では④に合致していると考えることができる。

5. 結びにかえて 「旅行ガイドブック」再考

以上、マレー社の全国の詳細な情報が網羅された形の旅行ガイドブックから、開国・明治維新の間もない当時の日本が旅行先として認知されるまでに、いくつかの段階の存在が読み取れた。最初は商用や宣教・教育のために短期滞在ないし居住する目的の外国人のために、日本に到達するための船舶情報を充実させ、開港地や外国人の立ち入りを許された都市を単独に扱った非常に範囲の狭いものが作成され

た。次に、その都市内の外国人にとって安全かつ最低限の生活レベルを保障できるか否かの情報が明示されるものが作成された。インフラ整備の他にも、教会や社交場などの情報も充実しており、外国人旅行者向けだけでなく、明らかにそこに居住する外国人向けに作られていた。最後には、日本に世界一周旅行で外国人たちが訪れ始めると同時に、日本国内旅行ルートが確立し始めた姿が読み取れた。

明治初期は外国人の日本国内旅行が基本的に認められていなかったために、大部分が居住外国人の国内旅行や商用での来日の合間の小旅行を想定していた。このため、掲載された土地も開港地とその周辺、大都市に限られている場合が多かった。日本に関する情報が物理的・法的に制限されていたために、日本はまだ「未知の国」の印象が強く、出版側だけでなく読者側も手探りの状態で日本を訪れていた。単独の都市を扱った旅行ガイドブックがほとんどであったのも特徴である。広範囲の地域を扱い、詳細で専門的な「マレーやベデカーの持つ完璧な知識や技術」が求められており、その願いは数年後には果されることになる。しかし、1872年に世界一周旅行が始まった時点から日本がその寄港地として認識されていたため、1880年には短期間の旅行者向けのガイドブックも登場した。旅行者の動線が、次第に点から線へと変化していく過程が読み取れる。小さく薄いサイズと簡潔な内容、横浜から上陸して陸路を西に、大阪・京都で完結する構成は、世界一周旅行の中の日本旅行日程であると言ってよい。

確かに、本稿冒頭の引用文で、グリフィスは「ベデカーやマレーが持っているような技術を持たない」という表現で技量不足を断っていた。1874年当時、グリフィスの『横浜案内』の読者が既にベデカーやマレーの読者であった可能性は十分に高い。これは、当時日本に居住していた外国人たちが知識人階級や上流階級が多かったという状況と、中川やヴォーガンが既に指摘しているように、マレーやベデカー社の旅行ガイドブックの読者は上流階級・知識人階級であった点と非常に親和性の高いものであると言える。そして、確かに、マレーやベデカーの遺した功績は、現在に至るまでの旅行ガイドブックの系譜の中で、信頼するに足る情報を掲載したという点で非常に大きなものであることは言うまでもない。そういった意味でマレーやベデカーを現在につながる旅行ガイドブックの始祖と位置づけることは決して間違っていない。しかし、始祖としてしまうことによって、それ以前に出版されてきた旅行ガイドブックの使用価値が低いということには決してならない。「マレーやベデカー」は、彼らにとって旅行先としてある程度の安心や訪れる価値を保障する情報源として認識されていた。それだけに、「マレー社の書式と同じ形式で書かれた」1881年の『旅行者のための中日本・北日本旅行案内』の出版が歓迎されたのだろう。

ここで改めて注意しなければならないのは、トーマス・クックの旅行業開始による、いわゆる「旅行の大衆化」は同じ流れの中にはないという点である。トーマス・クックが始めた、中流階級以下の人々でも安価に旅行が楽しめる団体旅行ツアーは、わずかに後のことである。トーマス・クックが最初に団体旅行ツアーを実施したのは1841年の禁酒運動大会の幹旋であったが、ツアーとして大成功を収めたのは1851年の世界初のロンドン万国博覧会の幹旋においてであった [Brendon 1991 (1995)]。マレーやベデカーがそのガイドブックを出版し始めたのは、現在明確な年号が分かっているだけでも前者が1836年、後者が1835年からである。わずか数年の違いともいえなくもないが、クックのツアーが始まる前には既に旅行ガイドブックが出版されていた事実を照らし合わせてみても、二者の流れは異なるものであったことは明白である¹⁷⁾。

上流階級などの富裕層の間で流行した世界周遊旅行や避暑・避寒旅行を、大衆化によって豊かな生活を送れるようになった中流階級以下の人々に対する顕示的消費の一つとしたマルク・ボワイエや白幡洋

三郎の指摘は、以上の旅行ガイドブックの系譜と非常に類似点が多いと言える [Boyer 2000 (2006), 白幡1996]。特に、白幡洋三郎はトーマス・クック社による旅行の大衆化と貴族・上流階級の旅行との違いについて、次のように指摘する。クック社によって多くの庶民も楽しめる団体旅行が盛んになったことで貴族・上流階級だけが特権的に享受できる旅のフィールドは狭められていった結果、上流階級が手つかずのオリジナルな『旅』を求めて新たに開拓した一つが世界周遊であった。したがって、この時期に世界周遊で日本を訪れる外国人は商人を除けば旅客の多くが貴族や上流階級だったという [白幡1996: 31]。

つまり、明治初期の旅行ガイドブックの読者層は、ほぼ同時期に旅行界に画期的な革命を起こしたクックのマス・ツーリズムの始まりと必ずしも一致しない。むしろ、そのような流れにある意味で逆らうような形で波が生まれ、初期の読者層が形成されていったと考えられる。主な読者層は教養や知識もあり、そして金銭的にも余裕のある富裕層であり、旅行ガイドブックになるということは彼らの世界、つまり欧米的文化圏に初めて知られ・認識され、評価されるということの意味していたのではないだろうか。

付記：本研究は、2009年10月14日に逝去された文学部社会学専攻藤田弘夫教授の最後の指導を受けたものでもある。この場を借りて、かつて筆者の指導教授であった藤田先生へ長年に亘るご指導への感謝とともに、ご冥福を心からお祈り申し上げます。

文献（英語）

- Dennys, N. B., et al., 1867, *The Treaty Ports of China and Japan: a Complete Guide to the Open Ports of Those Countries, together with Peking, Yedo, Hongkong and Macao*, Truebner. (1977, in CMC Reprint Series No.67, reprinted by Chinese Materials Center, Inc.)
- Gretton, J. R., 1992, "Introduction by John R. Gretton", in Lister, W. B. C., 1993 *A Bibliography of Murray's Handbooks for Travellers and Biographies of Authors, Editors, Revisers and Principal Contributors*, Dereham Books.
- Griffis, William Eliot. 1874a, *The Yokohama Guide*, by a Resident, F. R. Wetmore.: PREFACE.
- Griffis, William Eliot., 1874a, *The Yokohama Guide*, by a Resident, F. R. Wetmore.
- Keeling, W. E. L., 1880, *Tourists' guide to Yokohama, Tokio, Hakone, Fujiyama, Kamakura, Yokoska, Kanozan, Narita, Nikko, Kioto, Osaka, etc., etc. : together with useful hints, glossary, money, distances, roads, festivals, etc., etc...*, 1st ed., Farsari.
- Lister, W. B. C., 1993, *A Bibliography of Murray's Handbooks for Travellers and Biographies of Authors, Editors, Revisers and Principal Contributors*, Dereham Books.
- Satow, Sir Ernest Mason, 1875, *A Guide Book to Nikko*, "Japan Mail" Office. (In 1998-2001, reprinted by *Collected Works of E.M. Satow, pt. 1. Major works.*, v. 4. A Guide book to Nikko; A handbook for travellers in central and northern Japan (with A.G.S. Hawes), Edition Synapse.)
- Urry, J., 2002, *The tourist gaze Second edition*, Sage Publications.
- Vaughan, J. E., 1974, *The English Guide Book c1780-1870*, David & Charles.
- Yamamoto, K., 1873, *The Guide to the Celebrated Places in Kioto & the Surrounding Places*, Niwa.

文献（日本語）

- アーリ, ジョン, 加太宏邦訳, 1995, 『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』, 法政大学出版局 (Urry, J., 1990, *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*, Newbury Park: Sage Publications.)
- 岡本伸之, 2007 (1985), 「旅行案内書 (りょこうあんないしょ)」『平凡社大百科事典改訂版』, 平凡社, pp. 721-722.

- 里居真一, 羽生冬佳, 十代田朗, 津々見崇, 2003, 「明治中期に刊行された外国人向け英文観光ガイドブックの記述内容の特徴」『ランドスケープ研究 日本造園学会誌』Vol. 66, No. 5
- サトウ, アーネスト・メイソン, 庄田元男訳, 1995-1996, 『明治日本旅行案内 カルチャー編・ルート編』平凡社 (Satow, sir Ernest Mason., and Haws, A.G.S., 1881, 1884, *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan, 1st edition, 2nd edition*, Kelly, Murray.)
- サトウ, アーネスト・メイソン, 長岡祥三・福永郁雄訳, 1989-1991, 『アーネスト・サトウ公使日記 I・II』, 新人物往来社 (Satow, E. M., 1900, *The Diaries of Sir Ernest Mason Satow*)
- 白幡洋三郎, 1996, 『旅行ノススメ』中公新書
- 庄田元男, 1990, 『山書研究35 異人たちの日本アルプス』日本山書の会
- 砂本文彦, 2003, 「1930年代に欧米で発行された旅行ガイドブックに見る『国際リゾート地・ニッポン』」『旅の文化研究所研究報告』No. 12
- , 2008, 『近代日本の国際リゾート 1930年代の国際観光ホテルを中心に』青弓社
- 田中まり, 2004, 「19世紀末の西欧における日本観光と日本イメージの形成: マレー社の『日本旅行案内』に紹介された京都」『金沢星稜大学論集』Vol.38, No.2
- , 2002, 「『京都』における『日本文化』の発見: 明治期外国人の京都観光と日本の伝統文化イメージの形成をめぐって」『北陸学院短期大学紀要』Vol.33
- 中川浩一, 1973, 「“Baedeker”探索 地図入り旅行案内書の系譜(1)~(3)」『地図』11巻2号, 3号, 4号
- , 1975, 「英文日本旅行案内書の系譜」『地図』13巻4号
- , 1979, 『旅の文化誌 ガイドブックと時刻表と旅行者たち』伝統と現代社
- , 1985, 『観光の文化史』筑摩書房
- , 1995, 「『鉄道旅行案内書』の地図」『地図』33巻3号
- ブーアスティン, D. J., 星野郁美・後藤和彦訳, 1964, 『幻影(イメージ)の時代 マスコミが製造する事実』, 東京創元社 (Boorstin, D. J., 1964, *The Image: or, What Happened to the American Dream*, Atheneum.)
- 藤田弘夫, 2006, 「都市の歴史社会学と都市社会学の学問構造」『社会科学研究』第57巻第3・4号合併号, pp. 117-135.
- ブレンドン, ピアーズ, 石井昭夫訳, 1995, 『トマス・クック物語』中央公論社 (Brendon, P., 1991, *Thomas Cook: 150 Years of Popular Tourism*, Secker & Warburg.)
- ボワイエ, マルク, 成沢広幸訳, 2006, 『観光のラビリンス』法政大学出版局 (Boyer, M., 1999, *The Tourisme de L'an 2000*, Press Universitaires de Lyon.)
- 丸山宏, 1985, 「近代ツーリズムの黎明『内地旅行』をめぐって」吉田光邦編『十九世紀日本の情報と社会変動』京都大学人文科学研究所 pp. 89-112
- 山下英一, 1995, 「明治期英書の日本—外国人の国内旅行—」『国際関係学部紀要』vol. 15
- 横浜開港資料館編, 1996, 『世界漫遊家たちのニッポン—日記と旅行記とガイドブック』横浜開港資料館
- 吉田光邦編, 1985, 『十九世紀日本の情報と社会変動』京都大学人文科学研究所
- ラクストン, イアン, 長岡祥三・関口英男訳, 2003, 『アーネスト・サトウの生涯 その日記と手紙より』, 雄松堂出版 (Ruxton, Ian, C., 1998, *The Diaries and Letters of Sir Ernest Mason Satow (1843-1929) A Scholar-Diplomat in East Asia.*, The Edwin Mallen Press.)

注

- 1) 本稿でマレーシリーズとして使用している『日本旅行者のためのハンドブック』(*A Handbook for Travellers in Japan*)という名称は, 1894年の第三版から採用されている。第二版までのサトウが主編者として携わっていたものに関しては, 鉄道路線の未発達や情報提供者不足もあったため, 扱う地域を限定していたものと考えられる。
- 2) “Handbook for Central & Northern Japan by Mr. Satow and Haws”, *The Japan Punch*, March, 1881.
- 3) たとえば, [Boorstin, 1962 (1964)], [Urry, 1990 (1995)], [Boyer, 1999 (2006)] など, 観光をめぐる社会的な理論書においても, 旅行ガイドブックのもたらす観光活動への影響の強さが言及されている。
- 4) 例えば, 旅行ガイドブックを議論の中心にしている数少ない研究として, [里居ほか 2003], [庄田 1990], [田

中2002, 2004], [砂本 2003, 2008], [中川 1973, 1975, 1979, 1985, 1995], [山下 1995], [Vaughan 1974] がある。

- 5) 以下、旅行ガイドブックの引用はすべて引用者の翻訳による。
- 6) 近代旅行ガイドブックの歴史において、カール・ベデカー社とジョン・マレー社のどちらが先に旅行ガイドブックを出版したかという論争は、現在においても明確な決着がつかないのが現状である。ジョン・マレー社の旅行ガイドブックの書誌を執筆したグレットンとリスターによると、1992年の書誌執筆年現在最古のものは1836年である [Gretton 1992, Lister 1993]。また、カール・ベデカー社の公式ホームページによると、会社設立は1827年、「最初の」旅行ガイドブックである『ライン紀行』第二版は1835年出版である（どのような経緯か、初版の出版年に関する情報は掲載されず、他の資料においても明確になっていない）。(Baedeker Online “üeber uns: Die Verlagsgeschichte” 参照。Baedeker Allianz Reiseführer トップページ <http://www.baedeker.com/de/index.html>, 2009年11月20日閲覧)。
- 7) 筆者自身の経験として、当時のあらゆる階級の人々が、難なくそのような文章を読んでいたとは考えにくい。
- 8) これらの視点は、観光にとどまらず、異文化研究の膨大な蓄積をもつ文化人類学の視点を多分に含んだものである。特に、観光と文化人類学との密接な関係の検討は今後、観光を歴史的にアプローチしていく上で非常に重要であることは間違いない。今回指摘した西欧の一方的な言説と表象についての詳細かつ厳密な検討と議論は、今後、筆者の重要な研究的課題である。
- 9) 尚、1884年の第二版からは同社は横浜に移動しているが、詳細は確認が取れていない。
- 10) 尚、後年1977年の復刻版 (1977, in CMC Reprint Series No. 67, reprinted by Chinese Materials Center, Inc.) には、1860年付けの序文が掲載されていた。しかし、1867年に出版された現物には掲載されておらずその事情についても確認が取れていない。
- 11) 直訳で言うならば「ガイドブックと携帯参考書」になるが、日本語で書く「ハンディーガイド」には両方の意味が含まれると判断し、一語にまとめて訳した。
- 12) 編集・編纂者はデニスであるが、著者としてデニスの他に Wm. Fred MAYERS, F. R. G. S., H. M. Consular Service, and Chas. KING, Lieut. R. M. A. という名前も入っている。また、序文の末尾に HONGKONG とあるため、彼らは香港のイギリス領事館に勤めていた可能性もある。デニスを含め三人其他の資料に名前が登場しておらず推測の域を出ない。
- 13) 日本アジア協会は日本初の学会組織で、現在も活動が続いている。日本およびその他の国に関する情報の収集と問題の調査を行っている。会員の大部分は外交官・宣教師・教師といった知識人階級であった。サトウは『中日本・北日本旅行者のためのハンドブック』の執筆に、学会員の発表した論文や調査結果を多く用いている。
- 14) 全文を引用した。
- 15) 丸山宏によると、幕末～明治初期における外国人向け英字新聞や雑誌の記事や彼らの手記から、入京免状が発行される以前の入京制限の厳しさと外国人たちの京都への熱烈な憧れが読み取れるという [丸山, 1985: 98-99]。京都という場所自体の魅力ももちろんあるだろうが、入京制限や入京免状の存在が外国人たちにとっての魅力を更にかき立てる要因になっていたように思われるのである。これは、本稿で多く登場する東京や横浜などを訪れる人々と、「京都」という土地自体に対する憧れを抱く人々が必ずしも一致しない可能性を多分に含んでいるということもできる。その検討については、今後の課題であると考えている。
- 16) 当時の内地旅行権の推移については、丸山 [1985: 89-112] に詳しい。外国人たちの日本における生活の保障は、内地旅行権の推移と並行して向上していったことが伺える。
- 17) しかし、クック社もツアー参加客に対して「パンフレット」という形で簡単なガイドブックを配布していた [Brendon 1991 (1995)]。しかし具体的にどのようなものを配布していたのかは、まだ確認がとれていない。現在、トーマス・クック社はガイドブックを出版しており、日本版も販売されているが、旅行ガイドブック事業が正確にいつから始まったかについても正確な情報は見つかっていない。今後、詳細な調査が必要な点である。